若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

8月5日（1973年）
毎月5日、20日発行
第54号
購読料金 1部30円
定期購読 半年分800円 一年分1500円（〒代共）

叛旗

共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 仲代真理
発行所 東京都新宿区百人町2―16―18
小林ビル105号室
叢匯社気付
共産主義者同盟
「叛旗」編集委員会
TEL 03―362―0149
振替東京 162856

第二回
8月25〜26日 反帝戦線全国大会
（連絡先・叢匯社 03―362―0149）

8・25〜26

反帝戦線全国大会

8月25日(土) PM1〜9時
■基調確認 ■講演
所、杉並産業館ホール
（阿佐ケ谷駅南口五分）

8月26日(日) PM1〜9時
■方針提起・採択 ■戦線報告
所、未定（問い合わせ先、叢匯社）

主催 全国反帝戦線連合

全国大会へ全戦線―領域から結集し

秋期攻勢への進撃の狼煙を

大衆の内発的共同性の原基を政治情況の根柢に見据えよ！

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！ 二年有余に渡る「沖縄―砂川―三里塚」戦略の理論的、実践的展開と、われわれの持続せる分派―党派闘争の組織的展開を真剣な政治力の獲得として、われわれの革命へ向けた構想力、経験蓄積の深化ときり結ぶ更なる努力と飛躍が問われている。われわれは、この間、不可避的な情勢―情況の構造的な把握を、「過渡期」概念の特質性の裡に見てきたが、この対象把握の基底的な概念としての「過渡期」としかいいようのない歴史と階級矛盾の交錯の情況は、それ故に、様々な党倒錯者達の怒叫や、ヤブにらみ的な革命理論から遠くはずれて存在している。

われわれのこの数年間の諸実践が教えるところは、このような党倒錯者達の徘徊を決して許してはならないということであった。このような否定的現実との格闘の中から情況を見定める時あ

る意味で日本革命運動の最低の靱部をさぐり得るということであった。それ故に、多くの消化不良の革命理論をくわえ、下痢症状を起こしている部分と異なって、この最低の靱部を手に入れることを通して、日本の民衆がそうであったように、したたかわれわれも美食家になったともいえる。さて、われわれは、ときをつかみ、飛躍へ全力をあげなければならない。権力と民衆とわれわれの相互把握から、現下の早大―技機闘争の更なる深化・拡大に向けてあらゆる諸準備を整えねばならない。6・14を契機とする早大闘争への権力の介入へのわれわれの反撃体制の強化はその一例である。権力の支配危機を撃つ原基が、支配階級の諸再編への民衆の叛逆、また日本的自然としての政治的共同性のゆくえ、現存的生活感覚としての民主制の政治的共同性としての成熟度の評価軸を見据え、われわれは政治的包括力の深化を今秋期闘争に向けて準備しなければならない。

我々と政治情況・〈過渡期〉

我々と今日の歴史的現実をとりむすぶ情況を、あるいは70年代階級攻防の特質を我々が把握する場合に、いくつかの基軸や、対象把握の基準はあるが、これらを包括的に「過渡期」としかいいようのない情況―特質として措定してきた。ここで、真制の政治力を獲得せんとする我々には、不可避にかかわる我々のかくめいへ向けた構想力の深化と、経験の累積（時間化され得る抽象度をもった）が、唯、水先案内人となることが出来るのであると。しかし、この様な我々の主張は、普遍的実体主義者（先験的な〈マルクス主義〉主義者）からみれば、我々と歴史的現実をきりむすぶ情況の根底を「過渡期」としかいいようがないというよう

［…］層」を貫く生活的破局と呼んだ。また「上層」「下層」を貫く生活的破局を到来せしめる時代的、客観的条件としての戦争、恐慌の歴史的、現実的存在の指摘としてあったことである。

確かに我々も、客観的な情勢の内在的な展開の現段階として所謂「過渡期」を据えてきた。しかし中核派が述べるように、レーニン的な意味での生活的破局の到来としてでも、それを招来せしめる戦争、恐慌の全体的な展開を可避不的なものとしての「危機論」としてでもない。近代的な共同体の全世界的な登場、国家―市民社会という政治的、社会的再編成の登来という事態をメルクマールとしてである。そして、ここでは、幾分

［…］に、かかる歴史的現実の内在的展開の契機に主体の変化（階級矛盾）をくわえこむ方法的視座―核心点の欠落である。

周知のごとく、革共同中核派はレーニンの帝国主義論を「資本主義の帝国主義段階に於けるプロレタリア革命論の特殊段階的な一般理論」として措定した。このスコラ的な段階理論の措定の中には、明確な二つの誤謬を含んでいる。つまり、レーニン自身も経済過程の普遍性を解明すると限定づけた「帝国主義論」が、「プロレタリア」解放理論にまで高（？）められていることであり、更に、現実の構造的抽出の抽象度として段階論的な現実把握はあるにもかかわらず、つまり、そのような構造性

の感性と、ガイコツのような空想である。以上が第一の点である。

我々は、先に、中核派には、歴史的現実の内在的展開の契機に主体の変化（階級矛盾）をくわえこむ方法的視座―核心点がないといった。なぜならば、彼等の階級矛盾は先験的なものでしかないから、もともと歴史的現実の外に階級は措定されているからである。だから彼等にとっては、「組織本質論」は超歴史的であり、「組織現実論」はプラグマチズムであり、「組織実体論」は宗教的な党である。前述の中核派の「過渡期」概念の把握からすれば、「革命的情勢」＝終末を大衆に啓示するという構図しか生まれないのである。

別の方向からこの問題を更に追求してみよう。我々は、客観的変化を正確にとらえ、この契機に主

の解明、この本質的な把握と情況把握をなすこと。換言すれば国家の本質性を歴史累積として把握することであり、国家―世界関係の本質規定を歴史性として抽出することである。第二に、幻想国家、経済国家、規範的国家、社会的国家の総体像から国家の構造的抽出をすること。第三に、このような共同幻想体の総体像とともに、そこからはみ出ている、疎外されている民衆の内発的幻想的共同性をとらえることとしてである。

われわれが、ベトナム戦争から70年代初頭の戦後世界の再編劇で了知しえた本質的な問題は、例えば、民族国家に表象される国家、あるいは共同体間相互の関係での勝利も敗北もどこにも存在しないということであった。そしてそこではおそらく、歴史的な戦争史への意味づけが失なわれるように、

レーニンの教条的な理解以外には前述の問題など皆無なのである。

彼等は「反帝・反スタ」論で、国家―世界関係の歴史的本質性をイデオロギー的に封殺しており、また日本国家の特質を従来の左翼がそうであったように教条的にあてはめ、説明しているにすぎない。中核派は次のように書いている。

「『戦後民主主義』なるものは日帝による沖縄の分割移譲とそれを前提とした日米同盟政策、アジア侵略への足がかりとそのための国内体制（米軍基地、自衛隊など含む）、破防法を軸とする治安立法体系、入管体制部落差別、沖縄県民への差別・分断、女性・『障害者』への差別―その対極としての天皇制の存続を不可欠の要素として、前提として成立した圧制の体系である」（「前進」六四五号）

的な臭いがまとわりつくのもと、それらが啓蒙的な［…］ること、「民族的観念」［…］ョナルな共同性」の断絶［…］よらないからである。

エンゲルスは、「フラン［…］乱」の中で、徹底した民［…］一方では社会主義に転化［…］では社会主義を要求する［…］た。レーニンは、この限界［…］「完全な民主主義」と「［…］の完全化」の背理関係と［…］た。彼は、ここで民主制の［…］共同性としての成熟度を［…］級成熟の尺度として置き、［…］ら、国家の獲得―国家の［…］想力をプロレタリア独裁［…］家）として位置づけた。

今日の階級攻防の特質
—反帝戦線全国大会に向けて

さて、今日の階級攻防の［…］を検討していく場合に若干［…］ておくとすれば小選挙区［…］に血道をあげていた新・［…］闘のびした政治主張と、何［…］闘争の実践環にかかわる［…］きず呻吟している部分の［…］

存在攻防と国家批判
共産同救対部

学生運動の深部から〈かくめい〉を

もし私達が今のような情況の中で生き、なおかつ情況それ自身が内包している閉鎖的秩序と闘おうとするなら自己の行為の原点、座標軸を創出する以外にない。

立川で「直接、持続、実力」と語り、三里塚で「民衆の自発力」と語り、そして早大で「自立と戦闘性」と語ってきたのはほかでもない、私達が自己の原点を政治的「社会的」な自立によって創出しようとすることであった。困難なことは革マル派、日共等に典型化される日本的政治集団を「批判」していくことにあるのではない。いってしまえばそのような集団などどうでもいいのだ、そうではなく日共―革共同的なものを不断に生みだしてきた民衆の共同性、歴史的伝統をどこで越えるかに私達のアポリアはある。私達が「新たな社会運動としての全共闘運動」と語り社会性の側に引きつけて学園闘争を見ていったのは当然のことだが集団、共同性の性格規定に意味があったのではなく私達の闘いの持続の根拠を明らかにせよ、（そのことによってのみ「敗北の構造」を越えることができる）それに意識的であれ、ということであった。立川闘争の過程での反対同盟の解体や闘いに終始究然していった三多摩の民衆、この背後に進行している情況の本質と本質にふれることがない解体した「反対同盟」と「中核」のユ篤は、そして新聞に立川がでてからノコノコやってマルクス主義」を啓蒙せんとした革マル派、このようなかえされているのであり日本的政治そのものである。早のすげかえ劇や、虐殺と自分達は無縁だとする第四インモチーフも市民社会のどこにでもあることだ。このよう

……されたことがないのは原理的、歴史……民衆の一つの共同性が不可避に……己―政治集団の存在を賭けてかか……

更に早大解放―革マル放逐へ
「早大の日常」と深く訣別せよ

―早大闘争中間総括

西北地区反帝戦線
早稲田大学班

「あらゆる思想上の、ある……

(1) 早大闘争とその理念構造

……て特権的に保有してきた歴史性に規定されていた。が、しかし、こ……

(2) 早大闘争と運動―組織

……川口君の死が、「日常的な仮死」の極北情況であると同時にっ「政治的死」であることに象徴されている。そこでの理念的、思想的二重構造は、政治集団、大衆組織の不可避な壁であり、そこでの闘いにおける理念や、思想の現実的な基準は、対革マルとの闘いの実践的展開のうちに位置づけられてきた。

（1）で展開したように、大衆運動の矛盾の本質構造は、政治的問題が真に政治的であろうとすれば極めて観念的なものとしてしか提起されず、それにもかかわらず、具体的に提示し得る問題は極めて社会的な次元に属する、つまり個別的、具体的な問題としてしかないという点にある。それ故に、個別的、具体的な闘いを構築することと、理念的な包括性を有する二重の闘いを創出し、構造化してゆく共同性の内実の中に早大闘争の運動―組織の構造はある。

しかし根低的な早大闘争の核心は、「早大の日常」を、いかに根源的に掘り起してゆくかという点に集中しており、その意味で、そこでの普遍性の開削を、思想的拠点として、思想的結合の創出に全力をあげることにおいてしか、展望は語ることができないのである。

（一面より）

大量処分―告訴攻撃の破砕に向け
秋期攻勢へ戦列を打ち固めよ
―更に党―大衆止揚へ

南部地区反帝戦線
青山学院大学班

(1) 党派―大衆組織の歴史的規定性

(2) 政治集団の学生運動への関わり

（次号へつづく）

共産同政治論文集Ⅰ
〈かくめい〉への越境
発売中　700円

SECT6
大正闘争
資料集
B5版　¥800
残部僅少！

内　容
☆「SECT6」機関紙各号
社会主義学生同盟全国大会に結集せよ
憲法と革命、「精神の闇屋」のたたかいの矢
わずかな誤謬、ブント崩壊と社学同運動
非情の状況、第二次東大派批判
…………他
☆「SECT6」パンプ1号・2号
☆中央大学昼間部自治会ニュース3号
☆belum omnium contra omnes
☆WASEDA クロンシュタット1～2号
☆東大教養部社学同機関紙「行動者」1～2号
☆大正闘争概観 Ⅰ・Ⅱ
大正闘争 60～62年

☆解説
白昼の後退戦から闇の中の後退戦へ…………三上　治
「SECT6」について…………吉本隆明

発行　蒼氓社
東京都新宿区百人町2－16－18 小林ビル105号室
TEL (03) 362－0149
振替（東京）162856（代代 140）